



「ここを一つに平和を宣べ伝えよう」

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会 常任委員会

< 目次 >

1. お知らせ	5. 「献堂50周年を迎える祈り」
献堂50周年記念誌の写真募集 2	今月の祈り 7
第2回平和学習会の開催	
献堂50周年記念荘厳ミサの写真公開	6. 資料紹介
	「真理と恩恵」 8
2. 聖堂建設の歴史シリーズ	(愛宮 真備 著)
建築設計競技の実施 3	
設計者の決定 3	7. 部会だより
3. 献堂50周年記念荘厳ミサの模様	<総務部会> 8
4. ラッサール神父の思いで	<霊性・典礼部会>
建築家 村野藤吾氏のエッセー 5	<記念誌部会>

「わたしは世の終わりまで、いつもあなた達と共にいる。」



<写真上>

ザビエル聖腕の来広を期に旗揚げした「広島カトリック劇団」

(1949年 ザビエル記念館の舞台での記念写真。役者は壮年会、青年会、姉妹会、婦人会の信者でした。)

岩国教会 風呂井さん提供

(写真下) ザビエルの聖腕

(1949年6月3日、ザビエル渡来400年を記念して広島に巡回。教皇特使ギルロイ枢機卿は、「私は、広島の人々が如何に平和を望んでいるか良くわかる。私たちはヒロシマのために、平和のために祈る。」と挨拶された。)

幟町教会所蔵



お知らせ

献堂50周年記念誌の写真募集

原子爆弾の犠牲者の慰霊追悼と世界平和と友情のシンボルとして、建設された「世界平和記念聖堂」が献堂50周年を迎えました。献堂50周年実行委員会では、献堂の歴史を振り返り、聖堂に込められた全世界の人々の平和への願いを思い起こすために、「写真集」を作成したいと考えています。

建設当時の教会の様子や活動、司祭との交流の写真、工事中の写真などを募集します。特に、この聖堂が国境や民族・宗派を越えて、多くの市民の協力によって建てられたことを記録する写真などがありましたら是非ともご提供いただきたいと思います。

平和のシンボルとしての世界平和記念聖堂を多くの方々に紹介して行きます。

g g g g g

募集する写真の内容：

世界平和記念聖堂の建設当時の募金活動、建設工事、平和祈年祭や献堂式などの写真

世界平和記念聖堂で行われた行事や司祭や信徒との交流、献堂25周年、神冥窟などの写真

写真の形態：

- ・写真は、プリント、ネガ、スライド、電子データ(JPEG形式)など形式・形態を問いません。
- ・アルバムに貼っているもので、剥がせないものは、そのままお送りいただいても結構です。

提出方法：

- ・写真類を封筒に入れて、提出して下さい。なお、封筒には、住所、氏名のほか、提出された写真の点数をご記入下さい。また、各写真の番号と撮影日、撮影者、写真の説明を写真の裏か、別の用紙にご記入下さい。(提出された写真等は、返却しませんので、住所・氏名を必ず明記してください。)

締め切り：2004年10月31日

送付先：〒730-0016 広島市中区鞆町4-42

カトリック広島司教区

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会
記念誌部会宛

問い合わせ：広島司教区本部事務局 写真募集

(電話 082-221-6017)

第2回平和学習会の開催

広島大学平和科学センターの篠田英朗さんを迎えて「戦争が起こった社会に平和をつくる」と題する講演会を行います。これは、献堂50周年を記念して平和活動部会の行事として開かれるものです。講師の篠田さんは、学生時代からクルド難民(イラン)、ソマリア難民(ジブチ)への緊急援助のための短期ボランティアとして難民救援活動に従事されたほか、日本政府から派遣されて国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)で投票所責任者として働かれた経験をお持ちの方です。また、「平和構築と法の支配 国際平和活動の理論的・機能的分析」という著作で第3回大佛次郎論壇賞を受賞されるなど、紛争地域における平和構築活動に関する多くの著作があります。

現実に紛争地でどのように平和を構築するか、援助活動の貴重な経験を織り混ぜて、お話していただきます。是非ともご参加いただき、平和構築の取りくみについて学びましょう。

g g g g g

とき：9月5日(日)

午前10時30分～12時30分

ところ：世界平和記念聖堂(カトリック鞆町教会)
広島市中区鞆町4-42

問い合わせ：カトリック広島司教区

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会
平和活動部会まで(電話 082-221-6017)

献堂50周年記念ミサの写真公開

8月5日(木)に行われた献堂50周年記念ミサの写真を広島司教区のホームページに公開しています。教皇庁大使をはじめ、多くの司教、司祭の姿や、共に平和を祈った多くの参加者を見ることが出来ます。

= 広島司教区のホームページのアドレス =

<http://www.hiroshima.catholic.jp/>

訂正のお願い

8月号3ページ右の段、上から8行目、京都教区の古屋良之司教のお名前は、古屋義之司教の間違ひでした。お詫びし、訂正します。

< 聖堂建設の歴史シリーズ >

建築設計競技の実施

1947年に日本へ帰ってからラッサール神父は、さっそくプランの実行に移ることにした。記念聖堂を、ただ広島教区だけの問題ではなく全国的な運動で建てるために、1948年3月から朝日新聞社の協力を受けて、「広島カトリック聖堂の建築設計競技」の募集を行なうことにした。その設計競技については「平和記念 広島カトリック聖堂建築設計図集」(昭和24年6月15日、広島カトリック教会編、洪洋社発行)に詳しく報告されている。

ラッサール神父は、その報告書の序文で、「フェニックスがいつもその灰から生まれかわると同じようにこの日本古来の宝が新しい日本に清新な姿で復活しなければならない。広島記念聖堂設計競技は、この意図を持って建築界に素晴らしい機会を与えた。また、この設計競技は大規模なものとして終戦後始めて日本に行われ、かつ日本の教会史上に新たなページを開いた。かくして広島聖堂はあたかも新時代の里程標ともなるであろう。この聖堂が神の恩寵と世界の真なる平和が与えられる、象徴となることを熱望するものである。」と聖堂建設の意気込みを見せている。また、聖堂設計の主旨として、日本の性格を発揮するとともに戦後日本の新しい時代に応ずる提案を望むとし、モダン・日本的・宗教的・記念的というテーマを挙げた。

応募は、昭和23年(1948年)6月10日正午までとされ、募集規定要項の発表から2ヶ月余と短期であったが、高額賞金であったことも手伝って、合計177名の応募者があった。ところが、優れた設計は



(審査風景、右端がラッサール神父)

かなりあったが、完全に納得できるものが無かったので、1等当選者は出なかった。

その理由については、「多くの設計にモダンと記念的性格が顕著に具現されていても宗教的と日本的という点が非常に弱い。」という教会代表者の感想が記されている。また、「聖堂の建築が吾々の精神を地上から離して超地上または神の方へ上げるものでなければならない。聖堂建築の外観並びに内部とともにこの目的を達成するように計画することが大切である。たとえばゴシックの聖堂に入りあるいは外部から眺めた場合にキリスト教信者でなくとも強い宗教的印象を受けないものは、おそらく一人もいないであろう。全世界によく知られた範例が明らかに証明しているごとく、モダン・スタイルと新しい創造による聖堂においても、かかる宗教的印象を大いに付与することが出来る。」と感想に記していることから、教会側が宗教的であることを大事にしていたことが伺える。教会建築にふさわしい宗教的印象を具現化する提案を期待していたのです。

しかしながら、この結果は、後々になって、教会建築に果実を生むことになった。例えば、東京のカテドラルは丹下健三氏の設計、長崎の二十六聖人記念館と聖堂は今井兼次氏の設計などで教会建築の宗教的印象を持つモダンな建築が生まれている。

設計者の決定

1948年の半ばになって、今井兼次氏の勤めで、設計を村野藤吾氏に依頼することになった。彼は審査員の一人であったので、必要な条件を十分に理解し、しかもその時に足りなかった点をもわきまえていた。また、彼は関西の人として、関西ないし中国地方の気質をよく理解し、そして彼自身はまだキリスト信者ではなかったが、長女が小林聖心女子学院の卒業生であったことから、いくらかはカトリックの精神に接していた。本人も少し気になっていたのは、その時までの彼のよく知られた建築は、宗教的なものではなく、大阪や東京の有名デパートであった。いずれにせよ、彼は一度、広島まで来てラッサール神父と相談の上で決めることにした。

1948年の後半に、村野氏は大阪から夜行で広島へ来て朝早く熾町の司祭館に着いた。村野氏は、広島

に来る途中、二つの案を考え、いきなり出してきた。私たちがどの方向に進んでもらいたいのか、縦の線か横の線か、と意見を聞いた。それで、神を指している縦のほうが良い、と答えた。その他の具体的な事を相談してから、彼はその日に大阪へ帰った。

言うまでもなく、競技の審査員であったので、設計の四つの条件、すなわち、近代的・日本的・宗教的・記念的をよく覚えており、また審査の時に問題になった点も知っていた。彼は、聖堂設計の日本的な要素について、「神道の古い神社や仏教の寺院などを見ると、まず直接に道路から入らず、あるいは山を登り、あるいは橋を渡って聖域に入る。その途中で、心を世間から離してこれを清め、黙して聖域に入るようになっている。こうして、神の家に入るときにも直接に道路からではなく、心を神に向けながら橋を渡って聖域に入ることにした。」と述べていた。

聖堂の建築は、むろん近代的な鉄筋コンクリートではあるが、外の壁は灰色のレンガで、荘厳な落ち着きを与えている。こうして、いつまでも「原爆の地」の記念碑となって、二度とこのような災いを犯さないようにと訴えている。

なるほど、近代的・日本的・宗教的・記念的の四つの点が見事に生かされている。そして、早くから広島はこの聖堂は、ヨーロッパやアメリカでも日本の近代的教会建築として美術雑誌や本で高く評価された。(注-献堂の翌年に建築学会賞を受賞。)

なお、記念聖堂とはいえ、ただ恐ろしい破壊の日を思い出させるためでなく、それは現代の人々に真の平和と永遠の幸福への道案内にもなるはずである。そしてそのメッセージを知って、真直ぐ進んでいったのはほかでもなく、設計者村野藤吾氏御自身であった。彼は、自ら設計した西宮トラピスチヌ修道院において、ラッサール神父から曾孫と一緒に洗礼を受け、自分の設計で宣言した神への道を忠実に進んで、永遠の平和にたどりつかれた。(1984年11月26日逝去)

募金活動の取りくみ

さて、村野藤吾氏が早稲田大学教授の内藤多仲工学博士と共に設計にとりくんでいるうちにラッサール神父は一歩進んで募金運動を始めた。これも日本だ

けではなく、世界的レベルで行なった。建築工事と並んで行なわれた。

全国的な運動としては、「広島平和記念聖堂建設後援会」というのをつくり、名誉総裁として高松宮宣仁親王殿下、会長として広島出身の当時の大蔵大臣池田勇人氏の協力を得た。

名誉総裁となられた高松宮殿下はただ名前を貸して下さったのではなく、極めて積極的に興味をもって協力して下さった。たびたび岩国やこの近辺へ来られたが、その時には必ず広島にも寄って、建築の進行を御覧になった。塔ができた際、高松宮様は、やはりその急な階段を上まで昇って行かれた。

1952年6月30日の募金の中間報告では、全国の一流の企業、例えば各地方の新聞社、建築会社、銀行、デパート、ホテルなどの大口をはじめ個人的なものも含めて、合計1,450万円余であった。

そのうちに、ラッサール神父自身もまたヨーロッパとアメリカへ渡って募金活動をはじめた。

当時は、未だ最初の原子爆弾の驚きと恐怖が強かった。一方、ドイツなど多くの国も戦争の後を悩んでおり復興のために苦労していた。

それでラッサール神父はただ一般的な話ではなく、各地において、そこの産業などに応じて具体的なアピールをなされた。たとえば、祭壇、ステンド・グラスの窓、オルガンなどのように。そのとき、濱井広島市長も建設に協力なされた。たとえば、ケルン市長と濱井市長のあいだに極めて感激的な手紙の交換が行なわれた。

聖堂の四つの鐘は、特に珍しくて世界でも有名になった。普通なら教会の鐘はブロンズで出来ているが、この鐘は、上智大学のホイヴェルス神父の兄が関係していたルール地方の鉄工所の寄附で、鋼鉄でできている。音はちょっと硬くなっているが、当時、外国でも注目を呼んだ。後に東京の聖イグナチオ教会のためにも三つ寄贈された。

ラッサール神父は、ヨーロッパからアメリカへ渡って、同じように援助を願った。確かにそのとき実際に原爆に遭った体験者の話は、印象的であった。ラッサール神父は、後でいろいろな「土産話」を披露した。たとえば、ある若い男がどうしても祭壇の上に円屋根を寄附したいと言った。神父はむろん、屋

根ならその下の壁も必要だ、とお願いした。聖堂の祭壇部分とその上のちょっと変わった円屋根は、その人の寄附のお陰で出来た。

神父は、北米から南米へと渡って、それから日本に戻った。

その同じ頃、荻原教区長もヨーロッパで大活躍をしていた。以前、ドイツやオーストリアで神学を勉強していたので、彼はその流暢なドイツ語で人々を驚かせた。教区長は、欧米の十四カ国を訪問し、各地で大歓迎を受けた。たくさんの枢機卿、大司教、司教、ベルギーの皇太后陛下、スペインのフランコ將軍、ポルトガルの外務大臣、南米ブラジルのサン・

パウロ州知事、コロンビアの大統領、文部、外務、大蔵大臣、その他各国において沢山の知事、市長たちに会見して、平和を訴えた。ローマを訪れたときは、ピオ十二世聖下に、特別個人拝謁の光栄をたまわった。この講演旅行のとき、説教を351回、講演を390回行なったと書き残している。

出典：チースリク神父の「広島記念聖堂の建設」(幟町教会報「平和の鐘」281、282、285号) なお、設計競技などについて、必要に応じて編者が変更を加えた。

献堂50周年記念荘厳ミサの挙行

去る8月5日(木)午後7時30分から教皇庁大使エムブローズ・デ・パオリ大司教をお迎えして、三末司教の司式で、献堂50周年記念の荘厳ミサが挙行された。これに先立ち、7時15分から広島のカトリック教会が受けた大きな犠牲と献堂に至るラッサール神父のご苦勞、平和を願う人々の様子など世界平和記念聖堂の献堂の歩みがパイプオルガンの調べにのせて、スライドで紹介された。

この日、共同司式を務めた司教は、次の方方で、金管楽器アンサンブルの調べの中を厳かに入堂が行われ、荘厳ミサが始まりました。

教皇庁大使：エムブローズ・デ・パオリ大司教

釜山教区：鄭 明祚 司教

名古屋教区：野村 純一 司教

大阪大司教区：池長 潤 大司教

松浦 悟郎 司教

京都教区：大塚 喜直 司教

高松教区：溝部 脩 司教

那覇教区：押川 壽夫 司教

新潟教区：菊地 功 被選司教

また、教皇大使館からアンドレア神父、インファント教区(フィリピン)からマリオ・エスタブリシエラ神父、釜山教区から尹 景哲神父、各教区や修道会から多くの司祭が記念ミサに参加された。

閉祭に当たり、教皇庁大使の挨拶と各地から参集した会衆の紹介に続き、「平和を創る決意」を全員

で確認しあい、派遣の祝福の後、感謝のうちにミサが終わりました。



(入堂する教皇庁大使)

幟町教会 吉野さん提供



(ミサを捧げる司教・司祭)

広島司教館提供

<ラッサール神父の思い出>

世界平和記念聖堂の設計者である村野藤吾氏は、ラッサール神父と世界平和記念聖堂について次のようなエッセーを残されている。村野藤吾氏は、1891年生まれで、ラッサール神父は、1898年生まれ。お二人とも18世紀の生まれで、1983年に行われた「世界平和記念聖堂の建築をめくって」(講演と対談)に出席されたとき、村野氏92才、ラッサール神父85才で、ともに労苦を分け合った兄弟のようなお二人でした。この時もこのエッセーが披露されました。

「私は、はからずも今井兼次、伴野三千良、森忠一の諸氏とともに、聖堂の設計を担当することになり、私の事務所の近藤正志君が助手として参加した。構造は内藤多仲先生が担当され、現場監督は長谷川善積氏、工事は清水建設が当たり、広島支店の菊池辰弥氏が施工主任となって仕事を始めた。戦後五年目ぐらいであったと思う。

私はこの設計に当たりドイツの建築家ポール・ボナツの手法にならい、それに日本的風格を与えるように意図したが、結果はそれを十分に表わすことができなかった。しかし、ここで私は思わざる幸福に恵まれることになった。それはラッサール神父を知ったことである。

建物の規模は、五階建の建築がはいるぐらいの会堂の天井高を想像すれば概略のことはわかると思う。鐘楼は高さ百五十尺の塔になり、ドームの上にはフェニックスを付けた。そのころはまだ統制があり、自由に材料を集めることができないので、非常に苦心したが、それよりも物価騰貴には悩んだ。神父は



(鐘楼の屋上で工事現場をみる村野とラッサール神父)

あの長身で、小さなバラックに起居して建築のために専念し、世界中を廻って聖堂の募金に努められ、また日本でもこの企てに協力する人も多く、募金は相当の額に達したが、いかんせん、当時の情勢としては、予期のごとき募金はできなかったようである。

この間神父は、文字どおり東奔西走して世界の友に呼びかけては物心両面の援助を仰がれ、とくに神父の故国ドイツからの援助は長く続いたようであった。なかには、祭壇のために地上百尺のドームを寄贈したいと申し出る外人もあって、一時は途切れがちの工事も、ようやく29年に終わり、高松宮総裁が臨場され、また各国から関係者が集まって、盛大な落成式を挙げた。竣工後も各方面から建築に必要なものが次々に寄贈され、今井教授の原案で故武石弘三郎先生の原型による大彫刻が正面に飾られた。各国からの寄贈はその後も続き、昨年1階のステンド・グラスの完成をもってひとまず約十年になんなんとする工事も終わったようである。寄贈されたものの中には実に立派なものがある。中でもウィーン市寄贈のステンド・グラスやアデナウワー前西独首相のガラス・モザイクなどはみごとなもので、いずれも日本の建築界にとり、貴重な資料となるものばかりである。

長期にわたる神父の苦心について吾々は多くを知ることができないが、幾度か工事は中断のうき目にあったことから、大方の想像はつくと思う。あの長身の神父が三等車のすみの方で、身体を「く」の字に折って眠っておられるのを幾度か見かけた。その姿は痛ましくも哀れで、それを見て私どもは感動のあまり頭が下がる思いであった。神父はいまでも板張りの上に畳を敷いて寝ておられるであろう。禅を好み参禅してカトリックとの関係を研究しておられると聞く。私に何か頼み事でもであると飄々として来たり、私が忙しくてできなければ幾度でも足を運ぶという調子である。いつか工事も終わろうとするころ、神父から墨痕あざやかな筆跡で聖句が贈られた。

『看よ、神の幕舎は人々と共に在り
神、彼等と共に住み給はん』

出典：「十人百話6」(毎日新聞社、昭和39年)の中の「建築家十話」(村野藤吾著)より。

世界平和記念聖堂献堂50周年 を迎える祈り

【今月の祈り】

9月の意向

「我、平和を汝らに遺し、我が平和を汝らに与える」
(アーヘン市から寄贈された洗礼盤の銘文)

世界平和記念聖堂の正面入口に入って右側の奥に、
洗礼堂があります。ここには、1954年にアーヘン市
から広島市に贈られた洗礼盤が安置されています。

洗礼盤のデザイン原案は、懸賞当選案とされており、
アーヘン市が洗礼盤を寄贈するに当たって、広
く市民やデザイナーにデザインを募集したものと考え
られます。下の写真は、草花で飾り付けられた台
車の上に置かれた洗礼盤です。贈呈式の時の写真で
しょうか？

洗礼盤に刻まれた聖句は、ヨハネ福音書14章27
節です。聖書では、「私は、この世が与えるように
して、それを与えるのではない、心配することはない、
おそれることはない。」と続きます。また、前
段では「私を愛する人は、私の言葉を守る。また、
父もその人を愛される。そして、私たちはその人の
ところに行って、そこに住む。」とあります。

洗礼によって、「キリストにいる人があれば、そ
の人は新しい人である。古いものは失せて、新しく
なった。」(コリント 5-17)と教えます。「平和
の神が私たちとともに居られるように」(ローマ
15-33)心を一つに行動し、祈りましょう。



(聖書の言葉)

神から招かれたのですから、その招きにふさわし
く歩み、一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心
を持ちなさい。愛を持ってお互いに忍耐し、平和のき
ずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めな
さい。(エフェソ4.1-3)

(黙想)

(祈り)

2004年8月5日、私たちは世界平和記念聖堂献堂50
周年を迎えることが出来ました。この聖堂は、今ま
で50年の間、世界の人々の友愛と平和のしるしとし
ての役割を果たしてきました。これからもなお一層、
世界平和の道しるべとしての務めを担っています。
この聖堂のもとで私たちは、今なお多くの人々が戦
禍に苦しんでいる現実を見つめ、真理と正義、深い
友愛の心をもって世界平和のために祈ります。

被昇天の聖母に捧げられた世界平和記念聖堂によ
って、数多くの人々が本当の、そして深い心の平和を
見つけ、世界平和の礎(いしずえ)になりますよう
に。 アーメン

「今月の祈り」は、祇園教会が担当しました。



資料紹介

1950年代、ラッサール神父様は、盲学校の子供たちを招いて、木造だったザビエルホール^(注)でクリスマス会を催すなどしてくださいました。教えを学びたい生徒は、男子がラッサール神父さまのところへ、女子がレティチア童貞様(Sr.天野を当時はそう呼んでいた。)のところへ、毎週通っておりました。そのころ、ラッサール神父様が出版された「真理と恩恵」上・下(1959年エンデルレ書店)で教理を学んでいた松田俊昭さん(現在 岩国教会信徒)が寸暇を惜しんで点訳しました。当時は、カトリックの教えを点字に訳した本が無かったのです。尚、聖書の口語訳が最初に出版されたのが、1974年なので、「真理と恩恵」に多く引用されている聖書はラゲ師訳の文語体です。視聴覚障害者が点訳するためには、常に正確に読んでくれる人が必要です。松田さんは、在学中2年余の努力を続けましたが、卒業、就職で、完訳を果たせず、下巻の途中でやむなく中断しています。(幟町教会 山口裕子さん記)

^(注)ザビエルホール(ザビエル記念館)は、エリザベト音楽大学の南西の角にあるセシリア・ホールのあるところにあった木造の音楽学校の講堂で、1949年に建設。聖堂建築中は、主日のミサが行われた。

本書は、カトリックの教理と道徳の根本義を系統的にまとめて、これからカトリックを研究し、又は、これについて正しい理解を持ちたいと望む人には案内書となり、同時にカトリック信者にとっては信仰を深める助けとなることを目的として書かれた。

聖堂献堂の日から5年目に、日本においてもその文化に相応する日本的表現をもってキリスト教の教理を伝えることが望ましいとの思いから、ラッサール神父が本書を著した。

これはまことに困難な仕事で、東洋の文化を完全に消化して自分のものとして持ち、しかもキリスト教の教理を最もよく悟った人を待たなければ果たすことができないであろう。日本の文化や日本人をよく知り、どのように表現すれば日本人々によく理解されるかを常に念頭において稿を練ったと前書きにある。日本を愛し、日本人を熱心にキリストの道に導こうとした神父の思いが偲ばれる。

本書は、人間の普通の知恵だけで知ることのできる範囲の教えを説明した第一部(自然宗教)と、啓示に基づいた教えを説明した第二部(超自然宗教)からなっている。

「真理と恩恵」()

第一部 自然宗教

第二部 超自然宗教

愛宮 真備 著

昭和34年10月10日初版

(B6版、[]156ページ、[]286ページ)

発行所：エンデルレ書店

部会報告

<総務部会>

8月5日の献堂記念ミサの準備として、復刻版の記念バッジを作成、横断幕の設置、案内ハガキの配布、招待者の接待、キャンドル・ローソクの準備などを行いました。

<霊性・典礼部会>

式次第パンフレットの原稿作成、8月5日の献堂記念ミサのリハーサル(7月24日、8月4日)、ミサで映写するスライドの作成、献堂の歩み展のパネル作成と展示を行った。皆様の協力で、部会の目標であった心に残る記念ミサとする事が出来ました。

<記念誌部会>

8月21日に部会を開催した。記念誌の構成フレームを検討し、広く記録写真を募集することにした。次回、構成フレームに沿った写真の整理を行うことにした。写真の提供をお願いします。

献堂50周年ニュース

vol.01 9月号(No.8)

2004.09.01 発行

(編集・発行)

カトリック広島司教区

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会

常任委員会

〒730-0016 広島市中区幟町4番42号

Tel 082-221-6017

ホームページ <http://www.hiroshima.catholic.jp/>